
二つのリング

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つのリング

【Nコード】

N9510R

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

失恋し、安っぽいシルバーアクセサリーの指輪を池に不法投棄した私。

「お前さんが落としたのはどの輪だったかいのう。最近物忘れが激しくて」

老人の手にはまばゆい二つの指輪があった……

失恋、その一言に尽きた。

私は池の淵に立ち尽くしている。事情を知らない人が見たら、投身自殺でもするつもりかと早合点するかもしれないが、そんなとんでもない。

あんなニセモノのどうしようもない恋モドキのためにわざわざ私が命を絶つなんてもったいないことこの上ない。私が捨てたいのは、忌まわしい過去を思い出させる品だ。力いっぱい、それを投げ捨てる。小さな指輪、あいつの知り合いが作ったとかいうシルバーアクセサリーで、質屋に持っていくことすら叶わないくでもない代物だ。きれいに弧を描いてそれは水中に沈み、静かな水面に大きな波紋が広がる。

沈んだことを確認した私はせいせいしてその場を立ち去ろうとしたところ、背後から私に声をかける者がいる。

不法投棄をとがめられたのかとびくりと背を震わせながら振り返れば小さな老人がぼつねんと立っている。それも、ただの老人ではない。しかと水面に立つ彼は、イエス・キリストかはたまた池の主か。おそらくは後者だろう。見るからに年老いた老人の姿をしている。私は年老いたしわくちゃじいさんなイエスの像に、今のところお目にかかったことが無い。

老人は目を細めて私に微笑みかける。

「これこれ、その若いお嬢さん」

老人の右手にはまばゆい永遠の輝きプラチナダイヤモンドリング、左手にはゴールドダイヤモンドリングがあった。どちらにしてもあのシルバーアクセの指輪と比べ物にならない本物の輝きを放っている。

「お前さんが落としたのはどの輪だったかいのう。最近物忘れが激しくて」

いつもの私だったら、もっと違った回答をしていたに違いないが、その時はひどくナーバスで、ついでに詩的な気分浸っていたかったため、こう答えた。

「いえ、私が捨てたのは永久に失われた忌まわしき過去の思い出。そんな未来永劫光り続けるような指輪じゃありません」

「ふむう。そうか。お前さんは正直者じゃのう。ではいつか、お前さんに相応しい輪が与えられるよう、その祝福を授けることにしよう」

老人はそう言うのと、じゃぼんと水の中に姿を消していつてしまった。そこは、指輪をふたつくれる展開だろうと、慌てて淵を覗き込んだが、濁った水の中に何者の姿も見出せなかった。果たして、夢を見たのか、本当のことだったのか。夢を見たのが本当だったのか。当初の目的は果たしたはずなのだが、妙に悔しいのは私がいじましいからだろう。

さて、失恋すると旅行に出ると言うのは一種の定番だが、まさかアフリカにいく羽目になるとは思わなかった。ついでに言う与实际は旅行ではなく、海外転勤だ。新しいプロジェクトのためと言いくるめられたが、断るすべは私には無い。世の中厳しい。私以外の人材はいくらでもいるが、私には仕事の選択肢はない。

ということ、私はアフリカの某国で充実した日々を送ることになった。仕事以前の問題が山積みではあったが、失恋を忘れるということにかけては特効薬、いや劇薬と言ってもよかった。そして、同僚とその友人たちのホームパーティーで、同じ日本人だからという理由で一人の青年を紹介された。どうやら、あちこちの地面をほじくるのが仕事らしい。すっかり日に焼けて真っ黒になっていたが、確かに顔立ちは東洋人のものだ。

「はじめまして」

彼は白い歯を見せて笑った瞬間、私の心から、忌まわしい偽物の恋のことはすっかりと吹き飛んだ。これこそが恋。正真正銘、初恋だと確信した。そして、彼は私を受け入れてくれた。

運命の出会い。そう表現する以外、なんと言えは良いのだろうか。逢瀬を重ね、互いの家に自分の歯ブラシを置く生活を経て、一つ屋根の下で暮らすようになり、時に彼の仕事現場におじゃまさせてもらう。

こんなこととして何が楽しいのか彼のことをもっと知りたいという興味にかられ、彼をまねて土くれをスコップで掘ってみた。

「ちよつと、そこは勝手に！」

彼の怒号が途切れた。私がいじった土くれの中から現れた白っぽい破片に視線が釘付けだ。彼の真剣な視線に、私もそれをしげしげと見つめ、そして彼に全てを任せた。彼は慎重にそれを掘り出す。どうやら骨のかけらみたいだが、門外漢の私にはなにがなんだかさっぱりだ。しかし、彼は興奮している。その吐息は溶けそうなほど熱く、浮かぶ表情は恍惚としていた。白日の下、こんな彼の顔を見るなど思いもよらず、私は思わず赤面してしまった。

それから色々大騒ぎになって、あの破片は、人のご先祖様に当たるものだという結論が出た。それもただのご先祖様ではない。これまで世界中で捜し求められてきたサルから人へと進化してきたことを証明するのに必要な、

「ミッシングリンク、失われた輪の発見だったんだよ」

と彼は頬を紅潮させて、門外漢の私に説明してくれたが、私は別のことを考えていた。あの後、彼からもらった薬指に輝く輪と、その失われた輪と、あわせて二つ。あの老人は、確かに私に二つの輪をプレゼントしてくれた、そう解釈していいのだろうか、と。

（後書き）

人類の進化って分からないことだらけですよね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510r/>

二つのリング

2011年3月26日20時25分発行